

2022年度 入学試験問題

国 語

③

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
3. 問題は、問題一から問題三までです（1頁～13頁）。
4. 解答は、すべて解答用紙の指定された箇所に記入してください。
5. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。

札幌国際大学
札幌国際大学短期大学部

国語

問題一

次の文章は、詩とその詩の解説です。この詩と解説を読んで、設問に答えなさい。なお、設問の都合上、一部表現を変えているところがあります。

ねこほね

小池昌代

猫を撫でてみた。すると、毛ではなく、関でもなく、骨のかたちかてのひらへ残る。

あつたかいくほみやでつぱり。その、でこほこ。あ、これが猫。こほれそうにしなやかな、^Xこれが、とくべつ^Yのさびしさか。

^Y骨と骨をやわらかくつないで、いきものよ。私^Aはてのひらをひっくりかえす。

それから（おやすみ）とねこ^Aばねへいう。ちいさな声^Zで。（届くかしら）

すると、きしむような音がして、夜^Zに、ちいさく、鍵^Zがかかる。

（詩集『青果祭』）

「ねこぼね」というのは作者の造語ということになるが、猫という生き物の体と息づかいが、なんとも鮮やかに刻まれている。猫好きの人はこの詩をいっぺんに好きになるだろう。

以前だったら、わたしはこの詩の魅力がわからなかっただろうと思う。 I、わたしは、そもそも猫が嫌いだったのだ。犬は好きで子どものころから飼いつづけてきたが、最後のブアナ（スワヒリ語で旦那さん）という雑種が老衰の果てに痴呆ちほうを呈し死んでいったのがショックで、次を飼うのをやめた。

わたしが猫嫌いということ、 II 猫の方がよく承知していて、散歩するときなど、わたしの姿を見かけると飛んで逃げ去る。それが近ごろは、逃げるのもいるが、ちよつと離れた所から当方が通り過ぎるのを見送るようになってきた。あまつさえわたしBが通っても全然動かずに寝そべったままのままだ。

「ズボンなんか、うちの猫の匂いがついているからよ。それで、ああこの人は猫に親しい種族なのだと思われるのよ」と女房は言うのである。

彼女は猫も犬も好きだが、家にいる娘がこれまた猫大好き人間で、

「お父さん、猫飼いたい」

と言い出したのである。

そのころまだ存命中だった母が猫を非常に嫌悪していたし、なにしろ家長のわたしが嫌いなので、

「だめだ」

と言いつづけていた。

だが、ついに根負けして、娘の部屋だけで飼うなら、とOKしたのが III 始まりだった。

なぜ猫が嫌いか。理屈ではないから説明し難い。 IV 得体が知れないということだろうか。そうしたことが不思議な魅力たりうる場合

があるが、猫に関してはそうではないのだ。犬なら紐を引っ張って走らせると、ついには舌を出してハアハア喘あえぐが、猫はそういうところを見せない。自分の背だけの何倍もの高みに音もなく跳び上がるし、背中を下にして落としても、反転して——それも無理なく——普通の姿勢で着地し、何事もなかったように歩き出す。またそれがこの世に生まれてきた目的のように朝寝、昼寝、夕寝だ。

ところで、わたしが、

「ぼくは猫が嫌い」

と言うと、特に若い女性などが瞬間驚いた顔をし、その表情にさげすみの影が走る。猫が嫌いなんて、人としての感性や美質に欠けているとで

も言いたげだ。

「川崎さんて、そんな人なんですか」

という感じなのだ。

娘が勤め先の敷地の中にいた雌子猫を連れてきた。さっさとウリと名づけ、女房も相好を崩した。ブラウンがかった縞模様で、猪の子ウリボウに似ているところからの命名だそうだ。ふんとわたしは思った。

そのとき、わたしは二階の畳の部屋で昼寝をしていた。ふと足の裏がくすぐったくて目を覚ました。ウリだった。いつのまにか娘の部屋を抜け出してやってきて、

「コレハ、ドウイウドウブツナノダ？」

と、ちよつと引っかいたことらしい。体を起こしてにらみつけると、さつと階段へ逃げた。その小さな姿を目で追い、生まれて初めてほんのちよつとだがかわいいと感じた。子どもはどれも愛らしい。醜い動物の例に引かれるイボイノシシだって子どもはかわいい。

そのあと少しして、庭の小さな物置の上にウリがいて、つい、ほんの出来心で右手を伸ばしⁱⁱⁱのどをさすった。気持ちよさそうに目を細める。そんなわたしの僅かな変容を娘や女房が見過ごすはずがない。気がついたときにはウリは家じゅうを歩き回っていた。

女房に言わせるとウリはわたしに対して女房や娘には発しない甘えた鳴き方をするという。わたしにはそれがわからない。子猫はみるみる娘猫になって、わたしを見るとすり寄ってくるようになった。そして、

「ノドロサスレ」

と鳴く。そんなときウリの目はまごうかたなき雌のそれになっていると感じて、ぎよつとする。やがてわたしがやってくると、どこだろうとごろんと横になるようになった。一番好むのはわたしの手や足ではなく、はいているスリッパでウリの頭の裏側からのどにかけてさすってもらふことだ。その快感の姿態は官能的でさえある。

酔うとわたしはだらしなくなる。ついには刺身の幾切れを手のひらにのせてウリの鼻先へ持っていったりする。ウリも心得ていて晩酌を始めるとテーブルの下、わたしの足もとにちょこんと座って動かない。わたしのお人好しは完全に見透かされている。

朝、部屋の戸をがりがりやってわたしを起こし、外へ出たいとせがむ。仕方なく玄関を開けてやる。家の中に入りたときも、窓や勝手口の戸をがりがりやって合図する。雨でぬれているときは、入る寸前に捕まえて抱きあげ、足の先をぞうきんで拭く。ウリはそれが大嫌いだ。捻くと冒頭の詩「ねこぼね」を思い出す。ウリも娘盛りを過ぎウバザクラになった。思えばウリは生まれて初めてわたしに近寄ってきた猫なのだ。

問一 空欄 I Ⅳ に当てはまる適語を、それぞれア～エから選り記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使うことはできません。

- ア そもそも イ だれよりも ウ 強いて言えば エ なぜかというと

問二 波線部 i～iii の語句の意味として最も適当なものを、それぞれア～エから記号で選りなさい。

- i 「当方」……………ア あなたの方 イ 彼の方 ウ 自分の方 エ あちらの方

- i 「相好を崩した」……………ア にこやかな表情になる イ 穏やかな表情になる

- ウ 怖ろしい表情になる エ 悲しい表情になる

- iii 「出来心」……………ア 生まれながらにして持っている良くない心

- イ その場で急に生まれた良くない考え

- ウ いろいろ考えた末に急に生まれた結論

- エ その時に思いついたかわいらしいいたずら

問三 「ねこぼね」の詩の五行目までから読み取れる感覚として、最も適当なものを、ア～オから選り記号で答えなさい。

- ア 視覚 イ 聴覚 ウ 嗅覚 エ 味覚 オ 触覚

問四 傍線部 A「ねこぼね」という言葉を、文章の筆者はどのように捉えているか。本文中より適当な箇所を三〇字以内で抜き出し、最初と最後の五字で答えなさい。ただし句読点も字数に含みます。

問五 傍線部B「わたしが通っても全然動かずに寝そべったままのまゐる」とあるが、それはなぜだと文章の筆者は考えているか。三〇字以内で答えなさい。

問六 傍線部C「抱くと冒頭の詩『ねこぼね』を思い出す」とあるが、文章の筆者が猫を抱いた時、「ねこぼね」の詩のどの表現を「思い出す」と考えられるか。「ねこぼね」の詩の中から十五字以内で抜き出しなさい。ただし句読点も字数に含みます。

問七 「ねこぼね」の詩の二重傍線部X、Y、Zから、最も印象的だと感じた一箇所を選び、選んだ理由を含めて、その印象を友人にわかりやすく説明する文章を書きなさい。

問題二 次の文章を読んで、設問に答えなさい。なお、設問の都合上、一部表現を変えているところがあります。

それにしても便利な時代になった。

インターネットの普及のおかげで、どこにも行かずとも、自分の部屋にいながらにして、一瞬でほしい情報を手に入れることができる。世界中のどこでも、I 地球の裏側でも、いま起こっている出来事、過去のニュースを閲覧できる。情報から情報へ、渡り歩いて、どんどん知識を増やすことができる。

別に、どこにも行かなくてもいい。部屋から一步も出なくても、べつだん不便はない。

当然、私もネットユーザーだし、多くの情報をそこから得ている。小説やエッセイを書くために情報を得るのも、多くの場合、ネットを通してである。II ネットは生活に不可欠になった。こうなってみると、ネットがなかった時代に、いったいどんなふうに情報を得ていたのか、他者とコミュニケーションをしていたのか、よく思い出せないくらいである。

などと書けば、「何をいまさら……」と思われるかもしれない。けれど、最近、若年層を中心に、ネットにつながってさえいれば、どこにも行かなくてもいいじゃないか、と錯覚してしまう人々がいることを、私は大いに懸念している。

部屋から出ない。人と会わない。遊びに行かない。旅になど出ない。III 美術館になど行かない。

そうなのである。ネットの普及で、人々が出かけなくなっている。書店に行かない（電子書籍もあることだし）、映画館に行かない（動画サイトで映画も見られるし）、そして美術館に行かない（名画はいくらでもネット上で検索できるし）。わざわざ出かける必要がない、出かける必然性がなくなってしまうてきているような雰囲気がある。

けれど、アートとは、本来そういうものではない。B わざわざ出かけて行って見るものなのである。

IV どんな名画でも、ネットで検索すればたちまち見ることができ。しかし、それは「本物の作品」ではない。「画像データ」なのである。

展覧会に行けば、入場するのに何時間も待って、やっと入れたかと思ったら人の頭しか見えなかった——というのを嫌う人は、何も苦勞して行かなくてもネットで見られるからいいや、と思ってしまうかもしれない。

一方で、どんな苦勞をしても「本物」を見に行く人がある。私もそのひとりである。なぜか。アートとは、「見せる」／「見に行く」という、アーティストと私たち、相互の体験があつてこそ、初めて成立するものだからだ。

よく思うのは、映画も小説も、鑑賞する人、読む人がいてこそ、初めて完結、成立する、ということ。アートも、まったく同じだ。アーティ

ストの息づかいが感じられる作品そのもの、それが展示される空間、美術館やアートスポットのロケーションも含めて、私たちが「体験することこそが、アートをアートにすることができる、たったひとつの条件なのではないだろうか。

C アートをアートにすることができる、その大切な鍵は、実は私たちの手の中にある。

そんなふうに見える、部屋にこもっている場合じゃない、という気分になってくる。アートが私たちの到来を、美術館で、展示施設で、アートのイベントの会場で、日本の、世界のあちこちで待っている。出かけていこうじゃないか、と気分が上がってくる。

いつも思う。アートは友だちなのだ。恋人でも夫婦でもない。友だち、である。

なぜなら、ほんとうの友だちは裏切らない。友だちは去っていかない。友だちは全力で応えてくれる。困ったときには力になってくれる。励ましてくれる。どんなときでも、無条件で受け入れてくれる。あたたかく迎えてくれる。

そして、美術館は友だちの家である。訪ねて行けば、よく来たね、と気持ちよくドアを開けてくれる。心ゆくまで友と対話し、悩みがあれば打ち明け、うれしいことがあれば報告し、喜びも苦しみも分かち合う。ときにゆつくりと、お茶を飲みながら、カタログを開いて時間を過ごす。友との会話を胸に蘇らせながら。

友だちの家は、世界中、さまざまな街にある。私はよくひとり旅をするのだが、ちっともさびしくはない。さあ、今日はどの友人に会いに行こうか、といつもわくわくする。

そんなわけで、「美術館のある街」というのが、旅の目的地を決めるときの大切な基準になっている。そうしておけば、旅の計画にやりがい
が芽生える。

また、特別展や、日本の各地で開催されている「地元密着型アートイベント」などは、いわば友だち主催のパーティーのようなものだ。期間限定で、多くの人が集まり、多彩な関連イベントも用意されている。なかなか会えない友だちに会えたりするのも、パーティーならではの楽しみだ。

友だちに会いに、出かけていこうじゃないか。

「展覧会を楽しむ極意を教えてください」と請われることがある。

それぞれが、それぞれに自由に楽しめばそれでいい——と答えたくもあるのだが、長年展覧会に通って得た「極意」がないわけではない。

D 実は「極意」といっても、ごくシンプルなこと。いくつかの事前の準備を怠らず、行ってからのルールのようなものを身につければ、ちょっとしたことで、展覧会が格段におもしろく感じられるようになるはずだ。

まずは、展覧会に出かけるまえの準備について。いうなれば、友だちの家に遊びに行く、パーティーに参加すると思えばいいわけである。何

も構える必要はない。準備するにも心が躍るはずだ。

まず、展覧会の開催期間と時間をチェックする。こういうときには、思い切りネットを活用する。出かけないためではなく、出かけるためにネットを活用すれば、大いに役立つ。

(中略)

展覧会には、アーティストの作品が漫然と並べられているわけではない。その展覧会の企画者、つまりキュレーターがコンセプトを創り、演出をしている。従って、作品の向こう側には、キュレーターの意図も表れているはずだ。それを読み解きながら見るのも興味深い鑑賞方法である。

古典的な展覧会や、海外の著名美術館のコレクション展であっても、その企画の担当キュレーターが時代やテーマなど、なにがしかの意図のもとに作品を展示している。

とりわけ、現代アートの展覧会の場合、キュレーターの手腕がいつそう光る。いかにアーティストのクリエイティブティーを引き出し。ドラマティックにおもしろく見せることができるか。クリエイターであるアーティストと、いわばプロデューサー的立ち位置のキュレーターのあいだで、おそらくは長く熟い議論があり、ときに闘い、融和して、展覧会を仕上げていく。

キュレーターが設定したテーマのもとに、複数のアーティストを集めて展示するグループ展などは、キュレーターの腕の見せどころだ。すばらしいグループ展を見たとき、キュレーターの意図がはつきりと伝わってくるものだ。そこには見事なハーモニーが生まれている。アーティスト同士、作品同士が、響き合っている。そんな展覧会に行き合ったとき、ほんとうに見てよかった、来てよかったと心底思う。

あなたが訪れた展覧会が、いいものだったかどうか。その結論は、「出口」にこそある。良質な展覧会を見ると、入り口にいたときの自分と、出口にたどり着いたときの自分が、違う自分になったことに気がつくはずだ。展覧会の出口は、新しい自分への入り口なのである。アーティストも、キュレーターも、新しい出口をあなたのために用意しようと、展覧会を創っているのだ。

(原田マハ・高橋瑞木『現代アートをたのしむ』より)

問一 空欄 I () IV に当てはまる適語を、それぞれア～エから選び記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使うことはできません。

ア もはや イ 確かに ウ もちろん エ たとえ

問二 波線部 i 「息づかい」、ii 「漫然と」の本文中の意味として最も適当なものを、それぞれア～エから選び記号で答えなさい。

i	「息づかい」……………ア	混乱	イ	熱意	ウ	生活	エ	調子
ii	「漫然と」……………ア	意図的に	イ	緩やかに	ウ	とりとめなく	エ	悠然と

問三 傍線部 A 「私は大いに懸念している」について、筆者の考えの説明として最も適当なものを、ア～エから選び記号で答えなさい。

ア インターネットによって自分の感じたことを発信することができるようになったことで、アーティストの意図などを考えずに批判をする人たちの出現を心配している。

イ インターネットによって仮想空間でのアートの楽しみ方に大衆が気づいてしまったことで、アートを鑑賞するスタイルが多様化してしまったことを心配している。

ウ インターネットによって自分が求める情報を容易に求められるようになったことで、体験さえもネットを通じて獲得できると勘違いをしてしまうことを心配している。

エ インターネットによってアーティストと鑑賞する側の人たちとの直接的な交流が可能になったことで、アートに対する評価が複雑になり過ぎてしまうことを心配している。

問四 傍線部B「わざわざ出かけていって見るものなのである」とあるが、筆者はなぜこのように主張するのか。その理由として最も適当なもの、ア～エから選り記号で答えなさい。

ア インターネットから得られるものは間接的な情報やデータであり、アーティストとの交流や自身の変化に触れることで得られる驚きや発見などは体験することではしか得られないから。

イ どれだけ下調べをしてアートに対する見識が深まっても、直接アートに触れなければ気づくことのできない細やかな技法や雰囲気などを味わうことができないから。

ウ キュレーターとアーティストとの駆け引きによって生まれるアートの魅力は、直接出かけて行ってキュレーターの説明を聞かなければ味わうことができないから。

エ アートに関する情報収集などを含め展覧会に出向くための苦勞を体験した上でアートに触れなければ、決して今までとは違う自分の感性や感貨に気づくことはできないから。

問五 傍線部C「アートをアートにすることができる、その大切な鍵は、実は私たちの手の中にある」の説明となっている次の文の空欄部に当てはまる適語を本文中より抜き出して文を完成させなさい。

アートはアーティストと私たちの（五字）があつて初めて成立するものであり、私たちが直接体験するかどうかは私たちの意志に委ねられている。

問六 傍線部D「長年展覧会に通って得た『極意』がないわけではない」について、その説明となっている次の文の(①)～(④)に当てはまる適語を本文中よりそれぞれ抜き出しなさい。また、(③)～(④)に当てはまる内容をそれぞれア～オから選び記号で答えなさい。

「極意」は(①)五字)と(②)九字)の二つから構成される。具体的に(①)は(③)などが挙げられる。また、(②)は(④)などが挙げられる。

ア 展覧会のコンセプトなどを説明したパンフレットを見ながら鑑賞する。

イ アーティストが展覧会会場に来ているかどうかを確認する。

ウ 友人と作品についての評価を語り合いながら鑑賞する。

エ 展覧会会場のこれまでの入場者数を確認する。

オ 展覧会のスケジュールを確認する。

問七 傍線部E「展覧会の出口は、新しい自分への入り口なのである」とあるが、どういうことか。次の語句をすべて用いて五〇字以内で説明しなさい。なお文末は「〜ということ。」とすること。

・展覧会 ・見る前に自分 ・人生

問題三 次の間にそれぞれ答えなさい。

問一 次のⅠ～Ⅳの傍線部の漢字と同じ漢字を含むものを、それぞれア～エから選び、記号で答えなさい。

Ⅰ 前後の関係から類スイする

ア 一人だけしかスイ薦できない

イ 昏スイ状態に陥ってしまう

ウ 彼は鉄棒で懸スイするの得意だ

エ スイ事、洗濯を一人で行う

Ⅱ 世界の注目をアびる

ア 有名になりヨク望を満たす

イ 肥ヨクな土地が一面に広がる

ウ 鳥が両ヨクを広げて飛び立った

エ 大きなヨク槽のあるお風呂

Ⅲ 告白を強ヨウすることがあつてはならない

ア 教室のヨウ子を静かに見る

イ ヨウ点を簡潔に説明する

ウ 私ヨウで電話は使えない

エ 少し静ヨウが必要である

IV オン故知新

- ア 教えを受けたオン師を敬う
- イ 彼とはオン信が途絶えた
- ウ 毎朝、体オンを記録する
- エ 不オンな空気が会場に流れる

問二 次のⅠ～Ⅲの傍線部の漢字の読みをひらがなで書きなさい。

- I 人気の銘柄を購入した
- II 皆既日食を子どもと見た
- III 古い風習が廃れてしまう

問二 次のⅠ～Ⅲの傍線部のカタカナを漢字で書きなさい。

- I 若くして失望やゲンメツを味わった
- II 飛行機にトウジヨウする
- III 産業の発展にトモナイ人口が増えた

国語

問題一

問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一	
	選んだ記号				i	I	
						ii	II
					5		
						iii	III
			10	30			IV

問題二

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八
I	i				①		
II	ii						
III					②		
IV							
					③		
					④		

問題三

問一	問二	問三
I	I	I
II		
III		
IV		

学 科 名	受 験 番 号	氏 名	
			総 点